

A Song for Every Season (1)

瀧山健一

A Song for Every Season は、長年に亘ってイングランドにおける民衆音楽の復興を牽引し、その功績によって2004年3月にロンドンのバッキンガム宮殿でチャールズ皇太子から MBE (イギリス帝国勲章) を授与された数日後に天寿を全うしたフォーク・シンガー、Bob Copper (1915-2004) 氏が、1971年に William Heinemann 社から出版した処女作である。父 Jim がその幼少期を綴った手記と晩年に語られた思い出話を元に、祖父 James の残した印象的な言葉や、そのほか氏自身が幼い頃見聞した事々など重ねながら構成されたこのエッセイは、氏の生まれ育ったサセックスの小村ロッティンデーン (Rottingdean)¹で四季の移ろいに沿って営まれる農事とこれにまつわる民謡の数々について12の月に分けて論じている。第二次世界大戦後、次第に広がりを見せた所謂フォーク・リヴァイヴアルの波にも乗って、同書は大手全国紙にも書評が掲載されるなど大きな反響を呼び、出版のその年にロバート・ピットマン文学賞を受賞した。

2015年は氏の生誕100周年に当たり、1月6日の誕生日には *The Telegraph* 紙が“Bob Copper: English folk music’s grand old man”²の見出しで記事を掲載したのをはじめ、同月26日付けの *The Guardian* 紙にも、生前地元で親交があり、今や全国区のフォーク・シンガーとなった John Boden が“Bob Copper and the sound of old England”³と題して寄稿した一文が掲載された。また、BBC の Radio 4 も、生前の氏の同局番組制作等に関する貢献を讃えて特集番組⁴を放送した。

イングランドにおける民衆音楽とダンスの普及に努める English Folk

Dance and Song Society は、同月24日にその本拠地ロンドンの Cecil Sharp House で“Ten Thousand Times Adieu: Bob Copper Centenary Event”⁵と題したコンサートを開催した。そこには The Copper Family をはじめ、イングランド・フォーク界の大御所たちがずらりと顔を揃え、声を合わせて歌で氏の偉業を偲び、大好評を博している。この EFDSS は、1898年に創設された The Folk Song Society と1911年創設の English Folk Dance Society が1932年に合併したものであるが、FSS の設立には、Bob 氏の父や伯父の唄う民謡が収集家によって見出されたことが大きな契機のひとつとなっており、また氏自身も20代の頃から民謡の収集活動や演奏などを通して、合併後の EFDSS の発展に尽力した。

地元イースト・サセックスでも、民衆音楽愛好家の集うフォーク・クラブの催しはもとより、州都ルイス (Lewes) 界隈で最も人気の高い醸造所 Harveys が“Copper Ale”と命名した記念ビールの発売を決め、氏の100回目の誕生日の朝にご遺族らを招いて、Bob 氏が好んで唄った歌のひとつ“*Oh Good Ale*”をご家族が合唱するなか仕込みを開始⁶するなど数々の関連行事が続いている。

このように現在でも多くの人に愛され、その功績が広く語り継がれる Bob Copper 氏の金字塔とも言える *A Song for Every Season* は、作品として完成度の高いものであることは言うまでもないが、一方で、19世紀末から20世紀前半における農村地域の変容と、生業を核とした庶民の日々の生活の様子、さらには歌をはじめとする伝統的な余暇や娯楽の具体例を、かつて氏の父 Jim が後世へ残すべく一つひとつ手書きで文字に起こした民謡の歌詞に五線譜で記した旋律を付したソングブックまで合冊して提示した、イングランド農村文化の実像に迫るには必読とも言うべき大変貴重な資料でもある。それゆえ本邦でもかの国に関心を寄せるより多くの人々に読まれ、楽しまれて然るべき書籍と思われるのだが、とりわけ父親の手記からの引用箇所や、農夫あるいは羊飼いの会話などには、Sussex 特有の方言や、農業や牧羊業

に携わる人々でなければ確たるイメージを得がたい一昔前の言い回しなどが随所に用いられており、non-native の読者には読みにくいと思しき部分も多い。そこで、これまで訳者が実施してきたフィールドワークの成果などとも照合しつつ、あらためてその内容と表現の解釈に関する適切性を精査し、必要最小限の訳注を本文中に付して、ここに最初の二月分の訳出を試みるものである。

今回の翻訳について、Bob Copper 氏のご遺族にはお許しをいただいている。作業の途上、とりわけ氏の娘婿に当たる Jon Dudley 氏には数度に亘って不明な点をご教示いただくなど格別のご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

1. 1974年のサセックス州分割後はイースト・サセックス州に属す。
2. *The Telegraph*, “Bob Copper: English folk music’s grand old man”, <http://www.telegraph.co.uk/culture/music/worldfolkandjazz/11308155/Bob-Copper-English-folk-musics-grand-old-man.html>, [29 March 2015]
3. *The Guardian*, “Bob Copper and the sound of old England”, <http://www.theguardian.com/music/2015/jan/22/bob-copper-and-sound-old-england-folk-song>, [29 March 2015]
4. BBC Radio 4, “Bob Copper”, <http://www.bbc.co.uk/programmes/b04yk377#playt=0h20m38s>, [29 March 2015]
5. Katy Spicer, “EFDSS matters: Bob Copper Centenary Event”, eds: english dance & song, Spring 2015, pp.4-5; Bob Copper: a look back, <http://www.cecilsharphouse.org/csh-news/110-january-2015/2358-bob-copper-a-look-back>, [29 March 2015]
6. Harveys, “Bob Copper Centenary Brew”, <http://www.harveys.org.uk/2015/01/bob-copper-centenary-brew>, [29 March 2015]

【1月】

「牧場へ目をやると、牛たちが干し草を食^はんでいる。
 蒸気のような白い息を吐き出しながら。
 かわいい乳しぼりのベツツイ、さあ急がなきゃ。
 しぼりたてのミルクに氷がは^はってるのを見つけちゃったから。
 薄い水を見つけちゃったから」。

「クリスマス・ソング」

クリスマスが過ぎて間もないある日のこと、家族そろった夕食の席で、まだ幼かったジムの方を向いて祖父〔訳注ジムの父。ボブの祖父。〕がこう言いました。「おめえ、習っとけることはぜんぶ今週中にやっちまうんだぞ。来週になったら羊飼いの仕事を始めてもらうからな。昨夜プラウ〔訳注近所のパブの名称〕でロイドの旦那に会ってよ、いいって言ってもらってるからよ」。ジムの学校通いはこうして終わりました。およそ正式と言うにはほど遠いやり方ですが、当時このようなことはごく普通に行われていました。

翌日、祖父はジムをつれてハイ・ストリート〔訳注村の中心の通り〕にあるチャーリー・リードの店へ行き、新しいオーバーコートと、食べ物を入れて持ち歩くための麦わらを編んだバスケットと、新品のジャックナイフを買ってやりました。週が明けた月曜の朝、一人前の男として認められたという思いに胸躍らせながら、ジムは温かなわが家をあとにします。靴底に鉄釘を打ちつけたブーツの足音を高らかに響かせ、早朝の闇のなかへ霜の降りた道をゆっくりと歩んで行きました。一夜のうちに、11歳の小学生から、ピカピカに磨かれたブーツを履き、「メシの入ったバスケット」を携え、生け垣から切り出して作ったばかりのまっすぐなハシバミの杖を手に、この先ほんのわずかとはいえ家計に一助を為し得る11歳の稼ぎ手へと成長を遂げたのです。父は手記にこう記しています。

1892年、11歳のときにオレは学校をやめて、だいたい歳のいったジョン・ヘンティっていう名の羊飼いのところで世話になり、羊飼い見習いとし

てロッティンディーンの農場で働き始めた。親方は牧羊犬にスコットランド産のきれいなコリーを2頭飼ってた。いい犬たちだった。夏場は少しばかりなまけ癖が出るのが玉にキズだったが。オレは、見た目で言うと、まあ、働きぶりってことからしても、昔ながらの毛の長いイングランドの牧羊犬が欲しいと思ってた。親方のコリーの名はビューティーとラッシー。ビューティーはラッシーの母犬で、ラッシーには兄弟のラディーってのがいた。ラディーは、ブラウンさんがお住まいだったチャロナズ農場でペットとして飼われてたんだが、オレは、農場に立ち寄りゃあ、そいつを丘の方まで運動につれてってやらなきゃならなかった。あいつは牧羊犬むきじゃなかった。太りすぎで。あいつに羊たちを追わせようとしたら、(ヤツじゃなく)オレが自分で走って行かなきゃならなかったもんだ。それでオレが怒鳴りつけると、さっさと走って家に帰っちゃう。役に立つどころか困ったヤツだった。まあ、もう死んじまったが。

ジョン・ヘンティは羊飼いの頭目^{とうもく}で、若かりし頃には兵士としてクリミア戦争に出征したこともあるという素性の人物でした。砂色をした毛むくじゃらの頬ひげをたくわえた長身の男で、冬になると、肩の上にケープのついた長いマントを羽織り、足にはボタン留めするタイプの長い革製のブーツを履き、頭には山高帽をかぶっていました。

彼は几帳面で、ゆったりと歩き、羊たちをおだやかに扱いましたが、面倒を見ることになった羊飼い見習いの振る舞いについては厳しくしつけを施す人物でしたので、突然そこへ放り込まれることになった少年には自ずと過酷な生活が待ち受けていました。冬のただなかともなると、丘の上は吹きさらしのまさに荒涼たるもので、ひとたび谷あいにある待避小屋を出て周囲の丘の上へと続く白亜の小道を登っていけば、このあたり特有の気まぐれな天候が猛威をふるい、羊飼いは強風にもあそばされて雨でずぶぬれになってしまいました。丘の上では、ドーバー海峡から吹き続ける風で丈の長い枯れ草^{たけ}が一方方向になでつけられて平らになっており、発育の遅いハリエニシダや背の高くならないリンボクは、草の高さに刈りそろえられて一面に広がっている

ため、海から吹きつける突風を防ぐ役割をほとんど果たしてはくれないのでした。このことをよく知っている丘陵地の羊飼いの大半は、ルイスの市場で6シリングで売られていた、広げると直径5フィートほどにもなる緑色ないしは青色の大きな傘を持ち歩いていました。しかし、自分の姿格好が人目には滑稽に映るかも知れないということなどまるで気に留めないあの羊飼いヘンティは、うっすらと輝く牧羊杖とともに、表は白で裏地が青色、そしてコウノトリ科と思しき鳥の頭をかたどった持ち手のある、女性用の日傘を持ち歩いていました。彼は堂々たる姿の人物でしたが、丘の上に出てこの日傘を広げると、そこには滑稽な光景が広がることになりました。何しろ「せいぜい彼の山高帽をおおい隠すほどの大きさでしかない」日傘というまるでこと足りないものにまもられ、背中を雨に打たれながら立っていたのですから。

羊飼い見習いの暮らしは、仕事が集中する短い時間帯と、孤独で退屈な長い時間帯が交互に繰り返されるものでした。「いつもの羊ども」以外だれも話し相手のいない丘の上でひとり過ごせば、昼の短い1月の日々でさえ、いつ果てるとも知れぬほど長く感じられるものでした。赤く染まった海から眠い目をこすりながら渋々出てくる太陽は、はるか南の空をうろろうした後、ジムがそろそろ家路につこうかと考え始める頃にはいつでも、まるで疲れ切った鮭のように再び海の底へと沈み込んでしまっていました。日がな一日、話し相手が見つかる見込みなどありませんでした。たとえ親方と丘の上とともに過ごすことになったところで、さほど良い話し相手にはなりませんでした——「羊飼ってやつあな〜んにも喋りゃあしねえ。ただ相手を口汚^{のし}く罵るだけでよ。ボロい牧羊杖を投げつけてきやがるなんざ、勘弁してもらいたかったぜ」。

羊の放牧は、170エーカーもの広大な芝地で行われており、ジムの仕事は、羊の群を農作物の育つ畑のなかへ入れないようにすることでした。手記に記されていたように、ラディーはこの点でほとんど、もしくはまるで役に立ちませんでしたから、見習い坊主は手にした棒と小さな二本の脚だけでやるし

かありませんでした。走る速さで追いつけないようなときには、群を引き返させるためにフロント〔訳注 イングランド南部の丘陵地に多く見られる黒白色をした石英〕の小石を拾い上げて群の先頭の羊たち目がけて投げつけるという手をとりました。もっとも、少々これをやりすぎたせいで、羊飼いたちは時折眉をひそめていたようですけれど。ジムは、羊たちが芝土の端に近づくはるか手前で向きを変えさせるものでした。これには理由があって、父の言葉を借りると、「一度クローバーとかイガマメみてえなうまい作物の味を覚えちまうと、そっからヤツらを引き離すなんて無理なんだよ。少なくとも犬なしじゃな。ジョンのおやっさんがいつも口うるさく言うもんだった。『畑ぎりぎりのところまで食わせるんだぞ、坊主』ってな。おやっさん、でかい声で叫びやがるんだよ。『そうしねえと干し草刈り頼まなきゃならなくなっちまうからな』ってよ。

ともあれ、ドーバー海峡を見下ろす広い丘の上で羊の世話をするというのが、父ジムにとって生涯初めての仕事でした。これはまるで海の上の仕事のようなものでした。何しろ、唇をなめるといつでも海水の塩味がしていましたし、天候が変わる兆候はすべて海からやって来ました。入り江を西へ18マイルほど行ったところにあるワージングの町の向こう側にハイダウン・クランプ〔訳注 ハイダウンの丘の上の木立〕が見えると、雨が降り始める兆しでした。夜中、大きな寄せ波が浜の砂利を梳くような音がしたときも同様でした。もし東へ向かうネズミイルカの群を見かけたなら、羊たちを谷あいへと避難させなくてはなりません。なぜならそれは、西から突風が吹きつける兆候だからです。逆に、イルカたちが西へ向かっていたなら、しばらくはおだやかな日差し为天候に恵まれると期待してよいのです。

かくして一日一日と時は過ぎていきました。丘の上で羊飼いが一緒のときには「ほめられるどころか叩かれてばかり」の毎日をほやき、ひとりのときには救いがたいほどの単調さに途方もなく退屈しながら。ジムは、長くそろえた毛糸でミトンやマフラーを編んでみたり、いつも持ち歩いていた小さな

ティン・ホイッスルを吹いたり、使われていない羊用の鈴を一對の小枝で叩いて昔の歌を奏でてみたりと、退屈せずに過ごすためのあらゆる手だてを日々試してみました。あるとき、ヴィカレジ・レインを上がったところにある収穫後の畑で羊たちに草を食ませながら、祖母の育てていたゼラニウムの支柱用にと、木の枝を編んで作られた古い柵の先から細い棒を切り出していたところ、その作業に没頭するあまり、一枚のクローバー畑に数頭の羊を迷い込ませてしまいました。ふと顔を上げた瞬間これに気づいた父は、慌てて羊たちを追い払いました。あちこちに羊たちがクローバーを踏み散らした痕跡がありましたし、それとは別に羊たちが足を踏み入れたというもっと決定的な証拠が残されていましたから、自分の怠慢が発覚しては一大事と血相を変えたジムは、それから15分ほどかかりっきりで、畑に落とされた羊たちの糞を拾い上げ、元の畑の方へと投げもどし続けたのでした。

またあるときは、紙袋で^{たこ}虱のようなものをこしらえ、長い糸の先につけて飛ばしたことがありました。ところが虱はブンブン音を立てながら群の上を飛び回り、羊たちに襲いかかりましたから、これにたいそうおびえた羊たちは四方八方に逃げまどってしまったのでした。しばらくすると、谷の向こう側からこれを見ていた羊飼いの親方がジムのところへ飛んで来ました。そして、当然ジムが想像していたとおりのことが起きたのでした。「このくそガキゃあ」。親方はジムを怒鳴りつけました。「メスヤギがしっぽを二振りする間ほどもほっとけやしねえ。オレがいねえとイタズラしやがるか、でなきゃあしょうもないシュミーズだかなんだか編みやがって」。かくして、大目玉を食らったジムはそこから放り出され、丘の尾根を越えたところで灌木を刈っている男たちの手伝いをするよう命じられてしまいました。

1月になるとハリエニシダの^{かんぼく}灌木が刈られ、羊たちの出産準備のために家畜場へと運ばれます。

いつも灌木刈りには3、4人の男が当たるもんだった。100束あたり3

シリングっていう出来高払いの仕事で、だいたい1日100束ってのが相場だった。木はうまく使ったもんだ——最初は出産用の家畜場を囲い込むのに使う。家畜場の外には、羊の赤ん坊たちが成長してくると小さい檻おりに収まりきれねえから、いつも2つ、でかい檻をこしらえてあった——てなわけで5フットの高さの檻で囲い込むとなりゃあ、結構な本数がいった。出産期が終わると、檻を作ってた棒きれはまた荷車に乗せられ、羊たちが草を喰らう草地へと運ばれて、小麦を作ってる側の生け垣のところ（風で飛ばされないよう2、3本ごとに芝土をかけて）積まれた。なにせ羊飼いは牧草地の四方全部に目配りすることは出来ねえし、実際、この保護柵が一方か二方向かをふさぐのに役にたった。小麦の刈り取りが終わると、棒きれはまた運び出される。1本ずつ拾い上げられ、手押し車に乗せられて、刈った麦束の山を地面の湿気からまもるための足場として使われた。これが最後だと思いかも知れん（が違った）。収穫した小麦を納屋に運び込む段になって、麦束が荷車に乗せられる。そうすると3人の男たちと、ときには車力も、残ったハリエニシダの切れ端を家に持って帰るもんだった。燃やして暖を取ったり、ゴミやらに火をつけたりするのにぴったりだったからな。

「ブッシュ・ウォッキング」と呼ばれるその仕事は、大変な作業でした。たくさんのあて布を施した一番古い服を着て、たちの悪いハリエニシダのトゲから身を守る万全の備えで臨む男たちにとってすらそうだったのですから、11歳の少年にとっては「たくさんのハリネズミに囲まれてもがいているような」ものでした。しかし、夕方、ノースゲイトの温かな調理場へ戻り、時計の針の音だけが静かに響く安堵のときを迎えると、そんな苦労などすべて忘れ去られました。カーテンを閉じ、ハリエニシダの切れ端が火格子のなかで燃えさかれば、ジムの濡れた衣服は乾き、あとはおいしい夕食を待つばかりとなって生気を取り戻すのでした。炉の前に敷かれた絨毯じゅうたんの上で兄たちとビー玉遊びのようなゲームをすることは、静かに出来さえすれば許されていました。こどもの立場からするとはなはだ難しいこの約束を守るとは、鼻先に眼鏡を乗せてイスに腰かけ、テーブルの上でガリガリと音を立てながら

鋼鉄製のペン先を走らせる祖父から厳しく申し渡されていました。祖父は、日誌の更新をし、来るべき新年に何を為さねばならないか考えていました。秋に大量の収穫を得て納屋を一杯にする農事暦の基本設計は、そんな小さな調理場で、先立つ冬の夕べに立てられていたのです。

ほどなく祖父は、「さあて、書き上がったぞ」と言うと、こどもたちのひとりに、階段下のビール棚に据えられた土台の上に寝そべる樽からビールを注いでくるよう言いつけました。パイプに火を点け、なみなみと注がれたマグからビールをたっぷり飲み込むと、イスを引き、暖炉の方に向き直します。しばらくしておもむろに座り直すと、祖父は、「どうだい、1曲歌おうじゃないか。クリスマスのがいいだろう。まだ終わったわけじゃないんだしな。クリスマスは12日続くもんだろ」と言って、頭をやや前に屈めるようにし、じっと目を閉じて唄い始めるのでした。

「クリスマスの1日目、愛しい人が私に贈ってくれたもの、
それは梨の木でつかまえたヤマウズラ1羽」

どんどん続いて最後は、

「クリスマスの11日目、愛しい人が私に贈ってくれたもの、
見世物のクマ11頭
クリスマスの12日目、愛しい人が私に贈ってくれたもの、
説教をする12人の司祭」

全員が、母までも、ともに声を合わせます。こうして家族の冬の夜は更けていくのでした。

【2月】

「小鳥たちがおしゃべり始めたヴァレンタインの朝のこと
ダーデン夫人のところへ召使いの娘たちと男たちが顔をそろえた。
モルにベットにドルにキットに、のろまのドリー

トムにディックにジョウにジャックに、からざお抱えたハンフリー。

さあて、トムがモリーにキスをして、ディックがベティにキスを
 そしたらジョウがドリーにキスをして、ジャックはキティにキスを
 そんでハンフリーはっていうと、からざお持ってるよ
 でもってキティ。そう、かわいいあの娘は搾乳桶を抱えてた」。

「ダーデン夫人」

まやかしの黄金色をした2月の太陽は儂い^{はかな}約束を決して果たすことは出来
 ないけれど、それでもなお、冬にうんざりしきった心にほのかな希望の灯
 をともしてくれます。いつも2月は人を惑わすものですが、田舎者はこれに
 振り回されたりはしません。短い日中の陽気で一時的に温められ、春が来た
 のかと錯覚した山黄蝶^{やまきちょう}が冬のサナギの状態から一足早く目覚めてしまったり
 するかも知れませんが、羊飼いとその見習い坊主にはそんなことに惑わされ
 ないだけの分別が備わっていました。彼らは、肌を刺すような冷たさの北東
 風にも、暖かでおだやかな天候にしばし恵まれた直後にときとして訪れるす
 べてを覆い尽くしてしまうほどの猛吹雪にも負けない、背の高いしっかりと
 した出産用の檻^{おり}を作ります。格言に真実ありということ、すなわち、「日
 が長くなるほど寒さはつる」ということを、彼らは経験的に知っていたの
 です。

兎にも角にもこの月は、羊飼いににとって最も大切な、言わば収穫期です。
 おなかに子を宿した雌羊たちが出産の時期を迎えるので、これに備えて栄養
 を十分に与えなければならないなど、一時たりとも目の離せない状態になり
 ます。当時、羊飼いたちは、キャラヴァン [訳注 トレーラーハウス。和製英
 語でいうキャンピングカーの一種。] のように台車の上に載せられた可動式
 の小屋を二頭立ての馬に引かせて、出産用家畜場に設けられた風除け塀の囲
 いのなかへと運び込み、数週間ここで寝泊まりするものでした。暖炉のそば
 から離れる勇気のなかなかなか出ないこの時節でも、荒涼たるいつもの丘の上で、
 羊たちと自分自身が少しばかりの暖をとり、快適に過ごすための素晴らしい

コツを羊飼いはわきまえていました。小屋のなかには小さなストーヴがあり、曲がったブリキの煙突がそこから天井に開けられた穴へと伸びていました。また、壁にはすきま風を防ぐために、空^{から}の麦袋が釘で打ち付けられており、さらに一番奥には床の上に切りわらを詰めた大きな長袋が置いてあって、夜には1時間かそこの仮眠を取れるようになっていました。しかし、羊飼いが最も注意を払っていたのは、もちろん羊たちでした。風をさえぎった檻の中には、地面の上に真新しい麦わらが厚く敷き詰められており、雌羊たちはそこに鼻で心地よい大きな窪みを掘って、冬の寒風にさらされることなく、あたかもさや一杯に収まったソラマメのように、母子ともに安心して温かくまた心地良く過ごせるようになっていました。

力強くやさしい羊飼いの手が、手荒ながらも素早く助産術に取りかかります。物静かで安心感を与える彼らの落ち着いた態度は、請け負った羊たちにもそのまま伝わりました。羊飼いは、この種の動物たちが何れ劣らず如何に臆病であるかということ、またほんの些細なことにもおびえてしまうということ、そして、もしそうなった場合、大量の流産や死産が生じかねないことをわきまえていました。夜中に見回るときには、黄色いやわらかな光で照らす角灯を携え、難産のものはいないか、問題を抱えたものはないかと注意を払いながら、檻から檻へと静かに移動しました。その一方で、片方の目は上向きに、片耳はそばだてて、腹を空かせたずる賢いキツネが近づく気配はないかと警戒していました。厳しい冬を迎えたキツネの食欲は、食べ物にありつけるなら何でもしかねないほど果てしないものでしたから、そのキツネたちにとって檻のなか一杯にいる子羊たちは、たくさん並んだ四つ足のおいしいご馳走のようなものでした。羊飼いは、小屋の隅のところに、「レノルズ様 (Maas Reynolds) [訳注キツネ]」が現れた気配を捉えたときに備えて、銃弾を込め、火薬を詰めた、頼みの前装銃を用意していました。灌木や足の長い草地をキツネが走る姿を目にしたときには、この略奪者をやつつけてしまうために大きな罠^{わな}も用いました。この方法でキツネの脅威に立ち向かうこ

とにためらいはありませんでした。というのも、たしかにこれは残忍なやり方かも知れませんが、^{あらが}抗^{すべ}う術のない子羊たちが瞬間に噛みつく一対の顎^{あご}によつてものの10分のうちに首を食いちぎられて横たわる光景や、子羊たちが経験することになるであろう恐怖のときに思いを馳せれば、鋼鉄製の罿^{あご}が為す一瞬の仕業は、きわめて人道的かつ正当なものと思われるからです。

出産期のジムの仕事は普段より多く、種類も様々でした。例えば、飼葉桶は干し草でいっぱいにし、飼葉にはマンゴールド^{〔訳注 飼料ビート〕}を加えましたし、小屋の中には火を絶やさないようにしました。雌羊が命を落とした場合、母親を失った子羊、ホブ＝ラム^{〔訳注 人の手で育てられる子羊〕}に、ストーヴで温めたミルクを飲ませてやらなければなりません。あるひどい年などは、あまりにもたくさんのホブができてしまったために、出産用の檻の近くにある納屋へ乳牛を一頭連れてきて、ミルクを与えてやらなければならないほどでした。ときには、子羊を亡くして乳のたくさん出る母親に、その役を担ってもらうこともありました。その際は、母羊に匂いでホブを自分の子だと思わせるため、ホブの身体に死んだ子羊の皮を巻き付けておくものでした。もちろん、巻き付けておくのは、この義理の母親がこれに慣れ、新しい子羊を受け入れるようになるまでの1日かそこらのことでした。ある日のこと、羊飼いのジョン・ヘンティが、まさにこの目的のため死んだ子羊の皮をはごうとして、ジムにジャックナイフを貸すようにいいました。買ってもらったばかりの真新しいそのナイフはジムの自慢の品でしたから、「いやだよ、ヘンティ親方。このナイフはほくが食べ物切るために買ったもので、おやっさんが死んだ羊なんかを切り裂くためのものじゃないんだよ。」という気持ちで、随分とむくれたのだそうです。

何度も、そして頻繁に繰り返されたことでしたが、羊飼いはのどが渇いてビールを飲みたくなる都度、1回につき1ペニーを払うという約束で、ジムにブリキのふたのついた琺瑯引きのカンを持たせ、1マイル半ほど離れた村へ1クォート^{〔訳注 2 パイント〕}買いに行かせました。ある日、親方が言い

ました。「おめえ、何べんロツティンディーンまでビールを買いに行ったかな」。

「30回ですよ、エンティ親方〔訳注「ヘンティ」の口語表現〕」。

「いいや。おめえ、ウソついてやがるだろう。そんなに飲んじゃあいねえぜ」。

ジムは親方を門柱のところへ連れて行きました。ジムは、行くたびにナイフでそこに切れ込みを入れておいたのでした。

「ねえ、見てくださいよ。30あるでしょう。半クラウン〔訳注2シリング6ペンス〕になりますよ」。

「このガキやあ」と、ジョン親方は言いました。「ほらよ。フロリン〔訳注2シリング銀貨〕だ。こんだけもらやあ充分だろ。もうかったって思いな」。

お次は子羊たちのしっぽ切りが始まります。出産がすべて終わり、子羊たちがこの幾分荒っぽい手術に耐えられるほどにまで成長すると、ある檻の隅っこに置かれた火鉢に火が入られ、羊飼いはその前に置かれた木製の長イスにまたがって腰を下ろします。ジムの仕事は、子羊たちをかき集め、鋤の形をした断尾用の焼きごてがどれも火の中で熱い状態を保っているようにしておき、それらをひとつずつジョン親方に手渡すというものでした。ジョン親方は焼きごてを受け取ると、子羊を1匹ずつわしづかみにし、長イスの上で自分の目の前に置いては、脚を広げた無様な格好をとらせ、手際よく一押しでこの作業をやってのけました。子羊たちの驚いたような鳴き声がいづらか聞こえ、羊毛の焦げる匂いが立ちこめると、やがて檻には切り尾の子羊たちがあふれかえり、木製の長イスの下には哀れを誘う切り取られたしっぽの小さな山が出来ていました。羊飼いの親方の機嫌が良いときには、ジムにもこれらを家へ持ち帰ることが許され、当時たいへんごちそうと考えられていたラム＝テイル・パイをおばあちゃんに作ってもらうのでした。

3年の間、父ジムは羊飼い見習いとして働きました。「タンティ、ときに

は「タンツ」とか「タントウ」というあだ名を付けられたのもこの頃のことです。どうしてこのようなあだ名が付けられたのかということのを思い返してみますと、誰のものであれ、呼び名というものが——本人の望むような名でないことも多いものですが——如何に単純にまた自然につくられて人につけられるものかということがわかります。かくして、父は生涯この名で呼ばれ、この名を携えて天に召されたのでした。その後ですら、父は、墓跡に刻まれた名前ではなく、この呼び名で後世まで語り継がれることの方がはるかに多いのです。ある日、父ジムは、羊飼いの親方と小屋の上がり口のところに腰掛けて食事をとっていました。ジョン親方は、冷めたマトン・チョップ2切れと白パンの上半分を食べてしまうと、自分のナイフを地面に突き刺し、抜き差ししてきれいにしてから刃を畳んでポケットの中へとしまい込み、それからチョップの骨を2切れ、犬たちの方へ投げてやりました。ラディーは、意地悪そうに片目のまぶたを上げて、取りに走るほどのものでないと判断しましたが、ラッシーは、横たわっていた小屋のかげからゆっくり起きあがって歩み寄り、匂いを嗅いでではみたものの即座に口に入れないことに決め、元いた場所へ戻ると、すぐさま眠ってしまいました。親方は鼻息を荒げて、こう言ったそうです。「タンティ (tanty) [訳注舌の肥えた (= dainty)] な野郎どもだぜ。ラムの季節にヤマトンなんぞ食いやしねえ」。父ジムはたいそう面白がって、この話をあちこちで何度もしましたので、ジョン・ヘンティではなく父が「タンティ」と呼ばれることになったのでした。

時が経つにつれ、ジムは仕事について不満を口にするようになりました。何しろ元気のありあまった少年でしたから、腰を落ち着けてこの手の仕事に取り組むことは出来ませんでしたし、腕のいい羊飼いになるかどうかなど相当に疑わしいものでした。ジョン・ヘンティ親方は、そのことをこんな風に見事に言い当てていました。「今までずいぶんとたくさんの見習い坊主を見てきた。ウィリー・ソロモンズ。あいつは最高だったし、おめえの兄貴のジョニーもよ、いいやつだったぜ。ところが、おめえときたら——とんでも

ねえへそ曲がり野郎だ。おめえと仕事なんざ金輪際御免被りてえもんだ」。

仕事を変えることについて父親が何と云うか、ジムには相当に気がかりでした。「父ちゃん、農場で働きたいんだけど。いつもおんなじ羊のヤツらと丘の上で過ごすのイヤなんだよ。メシの時間にジョウ・アンド・アリー〔訳注パンとチーズ〕をかじっていると、下の農場からほかの連中が遊んでる声が聞こえてきて、あいつらのとこに行きてえなあって思っちゃうんだよ」。結局、祖父は息子ジムが羊飼いの仕事を辞めることを認め、ジムは、教会のすぐ裏にあるコート農場で車力小僧として働き始めることになったのです。

ジムが弟子についた車力の親方の名は、ビル・リードといました。やせ形で物腰の穏やかな、幾分暗めの人物でした。顔の表情もどこかしらものうげで、両端の垂れ下がった口ひげがそれをことさら強調していました。「ホップ好き〔訳注ビール好き〕」のうえ、「嗜みタバコ」を常用していましたから、細くなった彼のひげ先は、いつもビールかタバコの汁、あるいはその両方にまみれていました。その外見は、不幸にも負う羽目になった顔にまつわる悩みの種がもとで、さらにひどいものになっていました。容赦なく悪知恵を働かす農場の若者たちがこれを見逃すはずがありません。ビルのあだ名は、まさにこれに由来するものとなりました。彼の片方のまぶたは「のろま(lazy)」と形容されていました。なかなか上げることが出来なかったのです。ですから彼には、人と話すとき自ずと頭を片方に傾け、まぶたが「上がりきる(=hoist up)」まで瞬きを繰り返すような癖がついてしまっていました。かくして彼は、ごく自然な成り行きで「オイスタップ(Oistup)」と呼ばれることとなったのです。ともあれ、やさしい人物でしたので、ジムはビル親方のところで働くのをとても気に入っていました。

親方が面倒を見ていた力持ちのシャイア・ホース〔訳注荷馬車馬〕4頭、トミー、ティプラー、プリンス、そしてスワロウは、教会墓地の裏手に並ぶ、壁の表面にフリント石の埋め込まれた背の低い建物のなかに繋がっていました。冬の朝、教会の時計塔が6時の鐘を打つはるか前に、ジムは、はっとす

るほど温かなこの厩うまやのなかへ人知れず静かに入っていくのでした。そこで1日の仕事が始まるのです。まずは各馬房の糞を片付け、足の長い根櫛ねくしで1頭ずつブラシをかけてやり、それからその日最初の飼葉を与えます。これらの作業はいずれも、角灯の蠟燭ろうそくの光の下で行われました。オイスタップ親方が、近代的なハリケーン・タイプのほやの付いたオイル・ランプよりも角灯を好んでいたためでした。万一、フォークいっぱいいっぱいの干し草を肩にのせて角灯の横を通り、誤ってこれを蹴倒したり、掛けてあった壁の釘からはたき落としてしまったような場合でも、蠟燭の火なら消えておしまいですが、オイル・ランプだと油がこぼれて床いっばいに散らばったわらくずに引火します。わらくずは乾燥していますから、これが言わば火口となって、瞬間に厩は炎に包まれることでしょう。

ジムはこう記しています。

車力の1日は、朝の5時、その日の仕事前に馬に飼葉をやり、身体をきれいにしてやる場所から始まる。これが6時までかかった。それから朝メシを食いに家に帰り、昼の弁当を持って、6時半には仕事をもらいに戻ってくる。仕事を割り当てられると、馬たちに馬具を付けにかけ、水を飲ませると昼の2時半まで仕事が続いた。と言っても11時から1時間は昼メシに当てたが、厩にもどったら晩メシに帰った。厩にもどるのが夕方たの4時。5時まで飼葉をやったり片づけをしたりで、それからメシを食いに家へ帰る。それから6時半にまた厩へもどって、7時までかけて飼葉格子を干し草でいっぱいにする。飼葉をやるのはそれが最後で、やると夜、寝床につける。とまあ、こういうのが冬の仕事で、作物の育つ春や夏だと、馬の飼料も自分で収穫しなきゃなんねえ。こいつあ晩メシと茶の時間の間にやるもんだった。馬1頭に荷車を引かせて畑へ出て、馬たちが1日に食う分のライ麦やらソラマメやらクローバーなんかを刈り取って来る。その日の仕事がこの辺の作物が育つ畑と同じ方向にあるときは、朝、荷車を引いてって、晩メシに行く前に収穫をするもんだった。車力つってえのは日々土にまみれる仕事だ。まあ主に鋤すき引きと、ときには羊の檻を運ぶような四輪の大型荷馬車を使う仕事とか、そのほかも

ろもろ荷車でやんなきゃならねえような仕事だ。鋤引きに行くときゃあ、決まって1エーカー鋤きかえさなきゃならなかった。つまり、畦溝を1本作っていくサセックス特有の車輪付き鋤 (Sussex Wheel plough) の後ろを10マイル歩くってことだ。

見習い坊主の仕事は朝の5時45分から。厩の掃除をして、朝メシの前に糞を積み上げといて、晩メシが終わるとわらくずを集めて敷きわらを作り、切りわらを飼葉にする。車力の親方が鋤引きの仕事に馬を2頭連れ出したなら、見習い坊主は、まあ一人前だったらって話だが、残りの2頭を並べて連れてって自分の持ち場の畑を鋤き返したもんだ。扱ったなかで最高だったのは、バング・ダドニーのおやっさんのとこのはみ出しの2頭、キャプテンとステイマーだ。あいつらいつも連れだって土を耕してた。(粘土質だったり白亜質だったり、土壌次第じゃ) 3頭立てで見習い坊主が鋤を引かせることになってたから、よそが3頭立てを組んであまった馬を作男が借りてきて3頭立てをもう一組作ることもあった。このあたりにゃあ馬は36頭いたから、2頭立てなら18組作れたわけだ。ただ、鋤は16台しかなかった。あるときなんぞ一枚の畑に若い雄牛やら何やらと一緒にそいつらが全部いるなんてこともあった。

そうです。この歌を唄う父ジムには、唄い込まれた詞の中身がすべてわかっていました。

「さあて、朝も^{はよ}早から鋤引き小僧
馬の背みがきに^{うまや}厩へ急ぐ。
もみがら、切りわら、食べさせながら
たてがみも尾も、まっすぐ^{ねぐし}根櫛で整えて
一生懸命、まっすぐまっすぐ鋤を引く。
たいしたもんさ。鋤引き小僧よ」。

昔の人たちが唄っていた歌の多くは自分たちの仕事にまつわるもので、歌が扱っている内容に歌い手が精通しているという事実が、何かしら真に迫った感覚を抱かせるのでした。耕夫が鋤引きの歌を唄えば本物の歌だと思えるでしょうが、どんなにきれいに唄っても、^{りとう}犁刀の刃や、馬具の引き革をしっ

かり固定するプラット・ピンのことを知らない人が唄ったものはそうは聞こえないでしょう。

手当は週給で5シリングから4シリングへと減ってしまいましたが、父はこの新しい仕事にとても満足していました。農場から農場へと移動し、近隣の町や村を訪ねるのが大好きだったのです。移動中にはたくさんの仕事をこなさなければなりません。閉じた門が行く手を遮っていたら荷馬車から飛び降りてこれを開け、丘を下る傾斜のきつい坂道では、片側の後輪の下に角度の着いた車輪止めをあてがってブレーキをかけました。逆に丘を登るときには、疲れた馬たちが一息入れようと立ち止まったとき荷車が後ずさりしないよう、ロード・バットと称される棒を荷車の後方へ落とさなければなりません。この棒は後輪の車軸に結わえられた綱に繋がれていて、地面に落とすと後輪のすぐ後に引きずられる格好となり、上り坂で後輪が止まると、後ろに転がり落ちようとする車輪の重みでこの棒が路面に食い込み、ブレーキの役割を果たすという仕組みでした。退屈に思える時間などほとんどありませんでした。ほかの車力見習いの少年たちと過ごす時間もまた大好きでした。晩ごはんの休憩時間の楽しみとして彼らが編み出した遊びは、その数においても種類においても際限がありませんでした。

ある雨の日、土砂降りのため納屋の外では遊べそうにありませんでしたので、見習い坊主たちは、厩の中にある梁はりにロープを1本かけ、そこに馬の首くび枷かせをつるして、立った状態で誰が一番遠くから唾を吐いて首枷の輪を通せるかという競争をしました。結果はジムの圧勝でした。もっともこれはあるものの助けを得てのことでしたし、とにかく何とも悲惨な結末をもたらしました。なんとジムは、馬がいつでもなめられるようにと飼葉桶のなかに入れてある岩塩の固まりをナイフで切り出し、「唾がたくさん出るよう」それに吸いついたのでした。刺激剤を得た口の中にはものすごい勢いで大量の唾液が吹き出し、吐き出された唾の描く美しい弾道にほかの少年たちは立ちつくすばかりでした。しかし、勝利の喜びにひたってられる時間はそう長くは続

きませんでした。ジムは、塩水の嘔吐作用が消えてなくなるまで、その日の午後いっぱい、厩の塀の裏で人目を忍んでこっそりと隠れている羽目になったのでした。

父ジムはこう綴っています。

ブライトンに行く四輪の大型荷馬車が日に1本、いや、ときには2、3本あった。麦とわらを運んでいって、肥やしを積んで帰って来た。わらはは1束1シリングだったから100束は積んでいった——これで5ポンド。肥やしは荷車いっばいで7シリング。てことで、合わせて107シリング受け取るもんだった。100は仲買商人、7は（どこのであれ）肥やしの分。なにせあの頃は内燃機関で動く車なんてなくて、わらを食う馬をたくさん飼ってたわけだし、おかげでオレたちあ肥やしの山を片づけるのに忙しかった。まあ、この肥やしがなけりゃ、うめえ野菜なんぞ作れなかったわけだが。

麦やわらを積んだ大型の荷馬車を3台も出すと、大量に肥やしを集められる場所を探し当てるのも一仕事だったろう。ブライトンへ行く車力（当時は叔父貴のトミーだった）なら大方わかってたもんだが、それでもいつでも見つかるってわけじゃあなかった。そんなとき車力は、見習い坊主に馬の面倒を見とくよう言いつけて、肥やしのありかを探しに行くもんだった。オレも何度もそんなことがあった。アバガヴェニー・アームズ〔訳注パブの名称〕（今は浜の上に横たわってる）の外で待ってたもんだ。そこは、いつも帰りに寄って昼メシを食うとこで、ロッティンディーン、オウヴィンディーン、それとテルスコムから来て肥やしを山積みした大型荷馬車を11台見たこともあった。あの頃はガキでもパブに入れて、ストーン・ジンジャー〔訳注ジンジャー・ワインの俗称。ストーンズのものが有名であったことから。〕片手にジンジャー・ビスケットを食ったもんだった。馬のヤツらはほっといてもおとなしくしてた。飼葉袋さえつけときゃあ。ほとんどの馬はそれに慣れてもいたし。

父がこのなかで名を挙げているアバガヴェニー・アームズは、かつてケン
プ・タウンのライフル・バット・ロードの南端にありましたが、海岸線の浸

食によって運命のときを迎え、ついにはその場所を明け渡すこととなってしまいました。次第にぼろぼろに崩れていき、崖から落ちて、父が記しているとおりに、浜の上で最期を迎えたのでした。ブライトン行き的大型荷馬車の仕事はジムのお気に入りでした。ここから得られる働いているという実感と、一人前に扱われているという気分を楽しんでいたのです。緩やかに下るロッティンディーンのハイ・ストリートを荷馬車が通りますと、ご想像のとおり、村人たちはレースのカーテンを片側に寄せ、田舎家の窓越しにこれを眺めて、「ブライトン行き荷馬車が通るぞ」と声を上げたものでした。家からご婦人が飛び出してきて、荷馬車の横を歩きながら、ブリキのやかんなど村の店では手に入らない生活必需品を買ってきて欲しいと車力に頼んだりすることもありました。ある日などは、「お父さんにサイズ10」のブーツを買ってきて欲しいと頼まれました。

「何色だい。」と、オイスタップが尋ねると、

「ちょっと待っとくれよ。すぐ聞いてくるから」。

数秒後、荷馬車はごとごとと音を立てながら少し先まで下って行ってしまっていました。まだ声の届く距離におりました。すると、先ほどの女性の大きくてはっきりとした声が聞こえてきました。

「何色でも構わないってさ。茶色でありさえすれば」。

あるときジムは、ブライトンへ向かう荷馬車で、「ビショップ」・ハイドという名の車力と乗り合わせました。崖から数ヤードもない場所を海と並行して走る道を村からちょうど出たところで、風車の前で馬に鎖まぐわを引かせていた車力仲間がこれに気づき、「飼葉袋は持ってきたかね、ビシュ」と大きな声で尋ねました。歳のいったこの車力が荷馬車の片側をのぞき込みますと、そこには馬たちの昼ごはんの入った飼葉袋がぶら下がっているはずでしたが見当たりません。「しまった。ちきしょう持って来てねえ。どうどう」。大きな声で馬たちを止めると、彼は道の脇にある土手に静かに腰を下ろして陶製のパイプに火を点けました。その間、ジムは歩いて丘を越え、ホグ・ブ

ラット (Hog Platt) [^{訳注}ロッティンディーンのシンボルとも言える風車の設置された西の丘を村の中心部へ向けて下る小道。かつては村からブライトンへ向かう馬車の主要ルートであり、また羊の群れを村の池へ誘導する経路でもあった。Hogs Plat が現在の正式な表記。] を駆け下りて厩まで飼葉袋を取りに帰りました。その距離およそ1マイル。あわてたりいらついたりするような感覚などなく、この車力と馬たちは辛抱強くジムの帰りを待ちました。そして何を気にかけるでもなく、まるで何事もなかったかのように再び移動し始めました。つまるところ、半時間そらの遅れなど大した問題には思えなかったのです。当時、この道をほかに乗り物が走っていたとは思えません。すれ違うことがあったのは、ブライトンまで1日2往復する乗合馬車の第1便が戻ってくるころぐら이었다でしょう。今日では同じ場所を、1時間当たり2000台以上の自動車が通り過ぎていきます。

しかし、父ジムが最も誇らし感じていたのは——真鍮を巻き付けた鞭を肩に掛け、背筋を伸ばして先頭で引き馬を従えノース・ストリートを闊歩する、ブライトンの街でのことでした。通りで馬具がちりんちりと音を立て、^{くびき}軛に付けられた幾つもの鈴が調べを奏でると、街の人々は立ち上がってこれを見つめ、街の犬たちは猛烈に吠え立てました。見習いの少年が誇らしく感じないはずがありません。父曰く、「羊飼いの仕事なんぞとは比べもんにならねえ。」のだそうです。